

在地性城郭と非在地性城郭について

中村修身

一、はじめに

中世の城郭の現地調査を長年に亘って行ってきた。やっと、城郭の分布や縄張りなどの特徴が判ってきた。城郭の規模から大規模城郭、中規模城郭、小規模城郭に分類し、守護大名・戦国大名を軸とした視点から本城、戦略的城郭、戦術的城郭と位置づけた。小都氏は広島県下の城郭調査に基づきこのほかに巨大城郭、陣所などの存在を指摘した(註1)。私自身も城郭と把握されているものに館があることに気付くなど現地調査の成果もあがりつつある。このことから城郭の果たす役割を論ずる基盤が整いつつあると言えよう。

ここで、これら中世の城郭を戦争施設と捉えると、相對峙する勢力の存在を考えなければならぬし、何が争いの原因になったのか。土地(農地)をめぐる争いも熾烈を極めたであろう。中世後半では土地(農地)に生産の基盤を置いた勢力と生産の基盤を土地以外に置いた勢力(商人、職人、常備軍など)の争いが基軸であった。前者は在地勢力であり、後者が社会的分業を背景とした新興勢力である。

二、在地性とは

土地に生産の基盤を置いた勢力の城郭とそうでない城郭をいかにして分離できるのか。どうすれば分離できるのか。

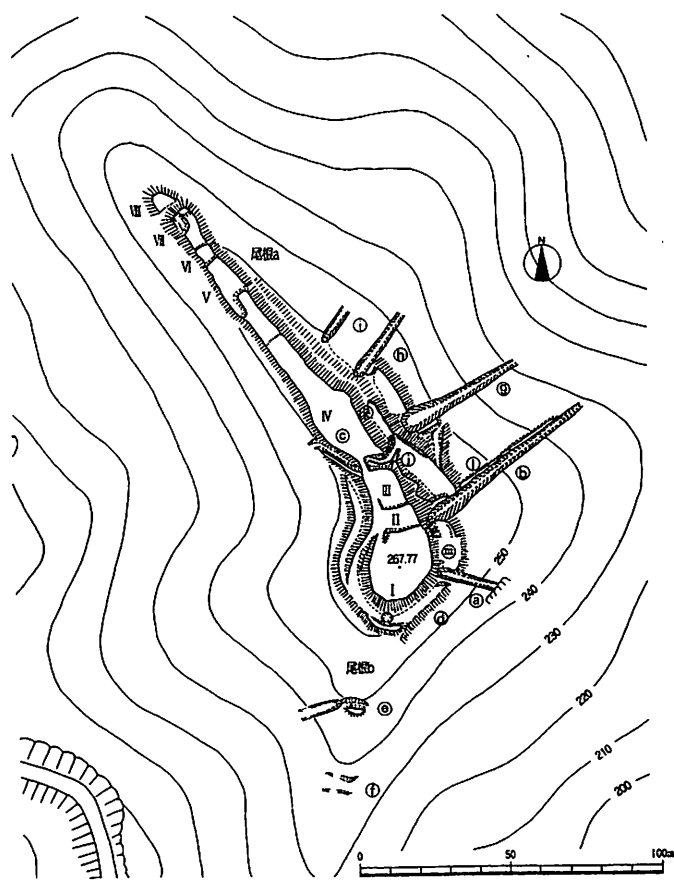
城郭の縄張りや築城技術などが中心の城郭研究の今日の段階では、在地性とか非在地性と言うと、城郭形態の築城技術やその芸術的景観などのことを指している事が多々ある。それはそれで大切なことであるが、城郭は戦争施設であることを考えるならば、在地に経済・生活の基盤を持っている勢力が造った城郭でも最新鋭の技術や形態を備えた施設を造り武装したであろうことを断言しても大過あるまい。また、その逆、非在地勢力の方が築城技術に優れたものを持っていると言っているのである。このような状況にあっても、縄張りや築城技術から在地性勢力の城郭かどうか判断することに勤めなければならないかもしれないが、より確実に築城勢力の在地性を示している事象として、山城と館、村の城や城郭と用水路の関係などを挙げえるのではなからうか。

山城と館について別(註2)に述べているので、ここでは要点のみ述べておく。豊後国、豊前国などでは十六世紀後半の在地領主の館は宅所と呼ばれている。また、最近の城郭調査の結果、小規模城郭と捉えたもののなかに、一辺が六十m前後の在地領主館が含まれている。なぜこのようなことになったのか色々考えてみると、館も土塁と水堀で治安維持を目的とした防備がされていることや実際に宅所(館)を奇襲した例が多々見られる事などから館を戦争施設としての城郭のなかで捉えるようになったのではなからうか。いづれにしても、山城と館は区別すべきであり、そのうえで、館は小規模城郭(山城)と一対となって在地に居住する領主を中心とした在地勢力の軍事施設として重要な役割をはたしていたことを指摘できる。

村の城の在地性については、藤木久志氏の「村の城」の伝承(註3)を参考に筆者の見解を述べておく。

藤木久志氏は、『大分県郷土資料集成 地誌篇』をもとに大分県内所在する十三の山城を村の城、つまり、百姓の城と考えられている。つまり在地領主と同様に在地を支える勢力の城郭である。海部郡の城(烏帽子岳城)の例(第1図)を紹介してお

こう。烏帽子岳城は佐賀関町東部の志生木、関、白木地区のほぼ中央、烏帽子岳（城山）頂にある。標高二六七mの山頂からは佐賀関半島を取り巻く速吸瀬戸を臨み、遠くは四国がみえる。山頂および尾根筋には全長三三〇mに亘って、九個の郭、腰郭、通路、堀切、五个の堅堀などの遺構がある。一部に石積みが見られる。遺構の大半は天正中ごろの形態が占めているようである。現地遺構から村の城と断定することはむづかしいが、藤木氏は『大分県郷土資料集成地誌篇』中の「昔、一乱之節 百姓等取りあがり申由 申伝候也」の記載や、フロイス「日本史8」一七四頁の「この城塞（野津の城塞）には（我ら）が従わねばならぬ（というような）城主がいる（わけでは）ない。（中略）たとえ全員（討）死しようとも、妻子を渡すことは、断じていたさぬ」といって、襲ってくる島津軍に強く抵抗したことを紹介し、これらの城は決まった城主領主のいない、いわば無主共同の地域の城であったと



第1図 烏帽子城縄張り図（大分県の中世城館第4集より）

位置づけている。これは在地領主と領民との諸関係を明らかにする観点から大変興味ある。本論の趣旨からみても田畑を耕す百姓が指揮権を持っていたように受け取れ興味深い。このような山城は領主とともに在地を担った勢力(註4)の戦争施設であることを示す一例として重要である。

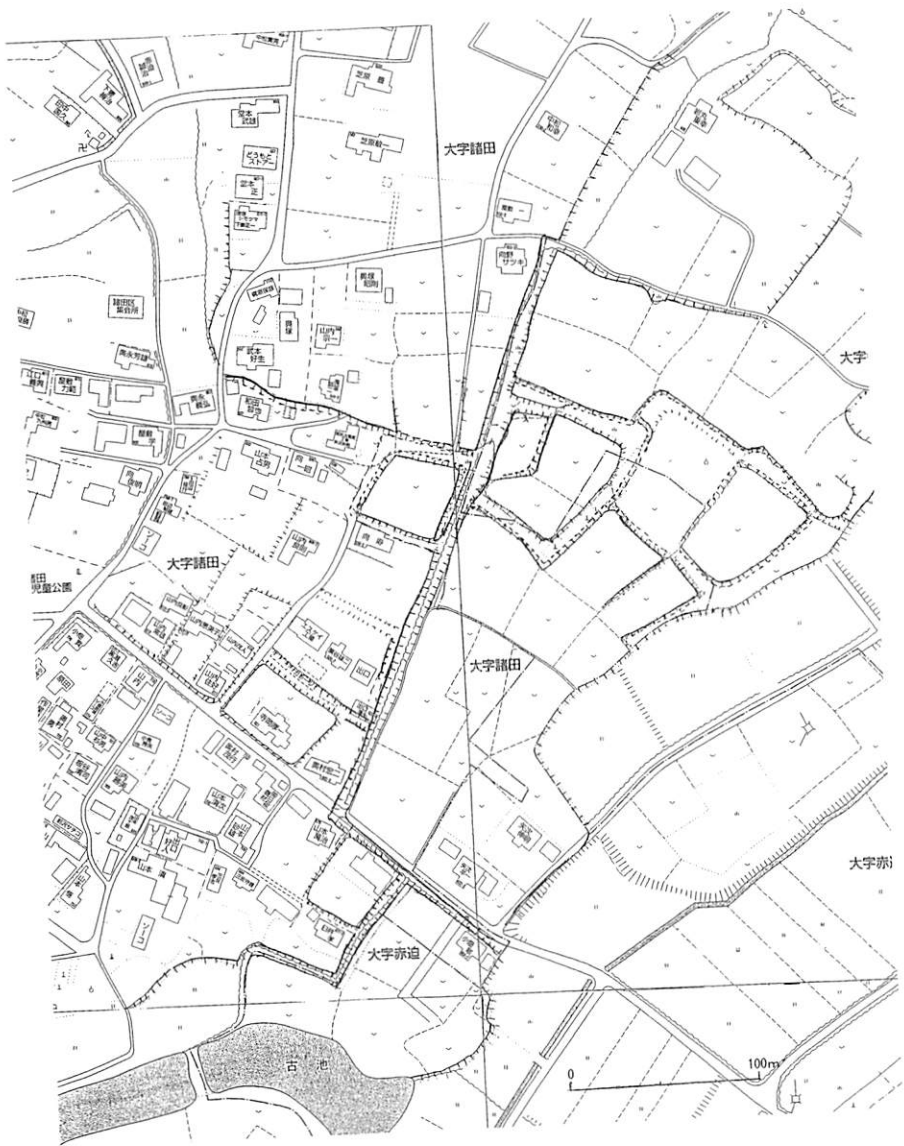
三、城郭と水路

山城を調査すると、地元の人々は城籠りの際の飲み水(井戸や水手)の位置を凄く重視する傾向がある。そんな経験を持つ筆者もいつしか城郭と水の関係を注意するようになっていた。山間部にある城郭の場合は城郭と比較的近接する場所に湧水が存在することが気になっていた。先だって中世の農業用水に詳しい別府大学の飯沼賢司教授とお話をする機会があった。教授から、湧水は飲み水としても大切だが農業用水における水源としての位置づけも検討してはとの、ご指摘を頂いた。山間部の具体的検討には到っていないが、平野部での城郭(治安防備された館も含む)と農業用水路や用水池が密接に関連した実例の幾つかを知ることができたので紹介し、土地に生産の基盤を置いた勢力と城郭との関係を確認しておきたい。

ここでは岩丸城、犬丸城、廣崎城と副城の例を紹介しておく(註5)。

岩丸城は中津市大字今津、大字諸田、大字赤迫にまたがって造られている。大字諸田字外専光寺一帯である。南から北(周防灘)へ延びる丘陵に約十の郭と堀が確認できる。城郭の規模や細部の特徴は今後の調査を要するが、城郭の上流約一〇〇mの所に二つ古池があり、その一つ、上古池から幅約六mの用水が引かれ、城郭の主要な堀として取り込み、これを通して下流の水田に水を供給している(第2図)。

犬丸城は中津市大字犬丸字五反、字加羅、字居屋敷などに所在する。幅七mの堀がほぼ方形に巡る(第3図)。また、城内に池跡が残っている。郭の数などについては今後の調査を要するが、犬丸川の左岸の南北に延びる台地を利用して造られている。犬丸城の堀と池へは約五〇〇m上流の池から長池と呼ばれている幅七、十mの人工の用水路を通して水は引かれ、さらに下流も人工の用水によって水田に水が供給されている。一部は今日も使われているが、沼地化が進んでいる。



第2図 中津市岩丸城と古池



第3図 犬丸城と長池と池

清道寺以外の建物は省略した

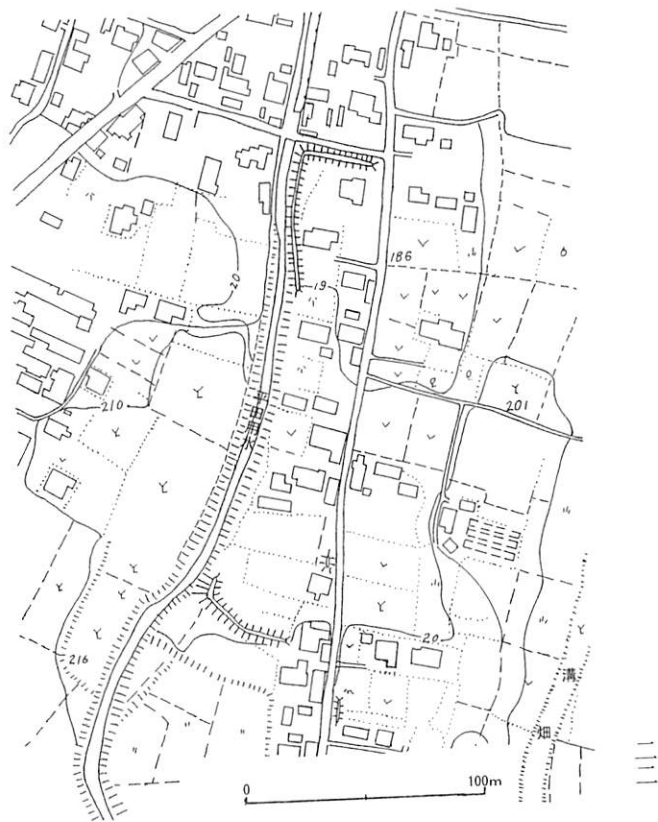
廣崎城は廣崎切寄とも言い、宇佐市大字中原字屋敷、字元屋敷などに所在する(第4図)。駅館川が山間部から抜けて宇佐平野に出たあたりの左岸に位置する。

廣崎城は土塁と堀で囲まれ防備された長方形の施設である。この堀の一つは廣崎城の約一〇〇m南の位置で駅館川から取水し、宇佐平野の水田に水を供給する水路となっている。それは今日でも平田用水路として満々と水を湛えて宇佐平野の水田を潤している。さらに、廣崎城のすぐ東に平田用水路以前(平安時代頃)に人手によって掘られた水路の痕跡が確認でき、字名でも溝畑として確認できる。

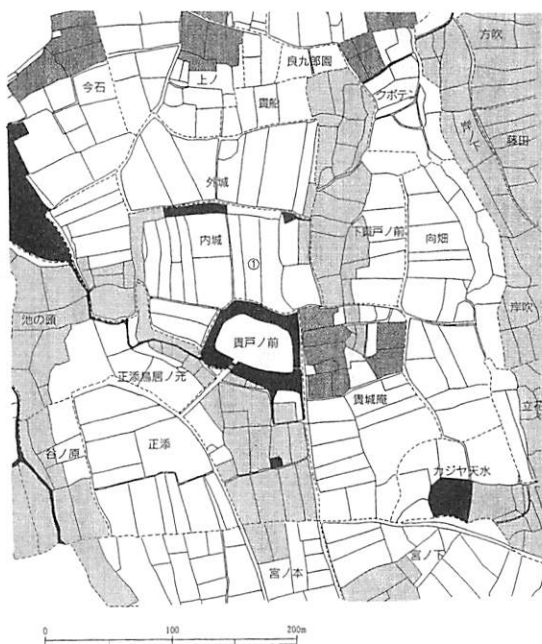
この城郭がいかに在地と密着していたかがわかる。

真玉氏館は西国東郡大字真玉字内城、字貴戸ノ前に所在する(第5図)。その後の土地利用で往時を復元するのは容易ではないが、辺約一五〇mのほぼ方形地割は確認できる。これを土塁が巡り、その外側には約一〇mの堀が巡っている。この堀跡の一部には今でも水が蓄えられ周囲の水田に供給されている。今は、この堀から約八〇m西の溜池が用水の首座を占めている。

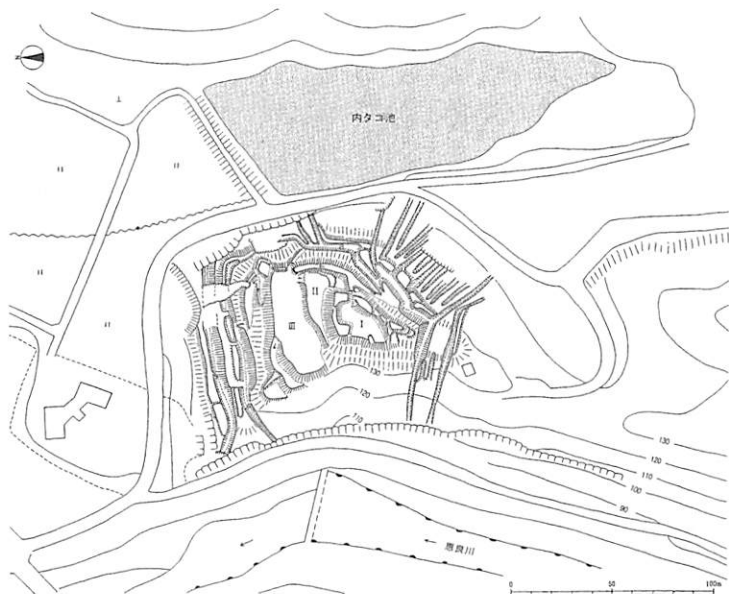
副城は宇佐郡院内町大字上副に所在する(第6図)。恵良川沿いに開けた平地を望む丘陵部先端に造られている。副城は三個



第4図 廣崎城と平田用水



第 5 図 真玉氏館周辺小字集成図 (大分県の中世城館第 4 集より)



第 6 図 副城縄張り図 (大分県の中世城館第 4 集より)

の主な郭に小さな郭が十数個付随している。それらを防備するかのように横堀がよく発達し、畝状堅堀群も造られている。

『大分県の中世城館第4集』は日常的な居住が行われていたことを指摘している。この城の西横には恵良川が流れている。恵良川は水田より深いこともあって川からの取水は難しい(註6)。そこで、副城の東横の谷に内迫池を造って農業用水を確保

したと考えられる。その際、城の占地には水の管理を強く意識している。

副城の場合は岩丸城、犬丸城、廣崎城などほど確実な水利支配管理を現地調査からは主張し難いとの見解もあろうが、城郭に近に近接したところのため池を造っている例(山香町小松城と城池、杵築市竹の尾城と山迫池など)は多々見られる。城郭に近接するため池は城郭の在地性を論じるうえで検討に値する。

四、まとめ

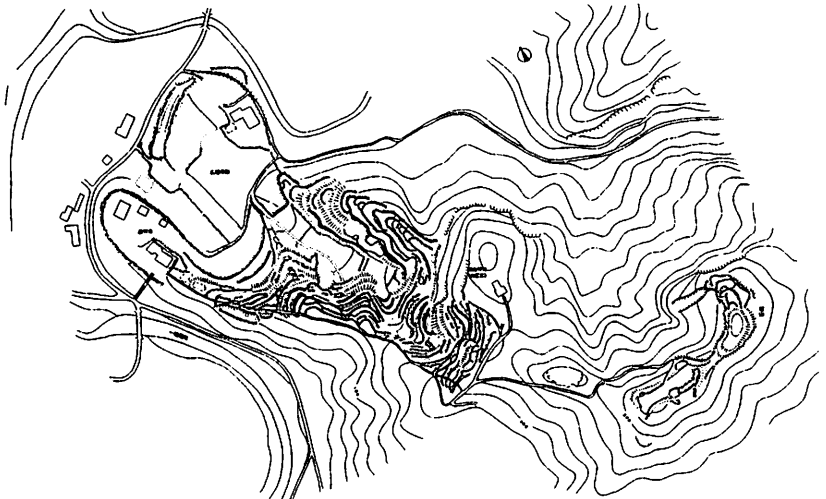
以上、在地性城郭の存在を主張するとしたら、何を根拠に主張できるのか、色々な要素があると思われるが、城郭と水路の場合を検討し、在地的城郭の存在を明らかにする必要性を提起できたとおもう。今後とも在地的城郭と合わせて非在地性城郭を明らかにすることが城郭研究から中世から近世への胎動を明らかにする方向を示していると思う。そのような意味から非在地的城郭のことについても触れてまとめに替えたい。

松尾城は大分県大野郡三重町大字松尾に所在する(第7図)。標高二七六mの城山から北に伸びる尾根と谷に、三重川と松尾川の合流地点までにかけての広範囲に階段状の郭群が残っている。北側の土塁はしっかりしている。この城からは中国産五彩、青花、白磁、タイ産陶器、国産瀬戸美濃系、備前系陶器など十六世紀後半から末葉の遺物が簡単に採集できる。松尾城の最初の築城はよくわからないが、採集遺物や遺構から十六世紀後半に大きな動きを感じる。天正十四年十月島津義弘の弟家久が豊

後国侵攻にあたって豊後府中、佐伯、大野方面攻撃の本陣となっている。まさにこの時の松尾城は、非在地勢力(島津勢)が在地勢力との戦いに使った城郭である。この時の島津軍組織形態がどの

ような仕組みになっていたかは、今回明らかにしえなかったが、その背景によっては、豊臣政権の場合と区別することが中世から近世への変化を明らかにすることになる。いずれにしても、生産の基盤を土地以外に置いた勢力の動向は土地に生産の基盤を置いた勢力よりも時代の変化を敏感に反映しているようであり、今後の研究が望まれる。

文末になってしまったが、本文を草する機会を与えていただいた別府大学白峰旬助教授や現地調査にいつも同行していただいた北部九州城郭研究会村上利男氏、いつも大分県下の資料をご教示くださった清水宗昭氏、小柳和宏氏、佐藤良二氏、その他多く方の協力をえたこと記し感謝の意に替えたい。



第7図 松尾城（大分県の中世城館第4集より）

註

- 1 小都隆 「中国地方の中世城館」『大塚初重先生頌壽記念考古学論集』二〇〇〇
- 2 中村修身 「豊前国の中世城郭について」『史学論叢第三六号』二〇〇六年三月発刊予定
- 3 藤木久志 「村の城」の伝承」『飢饉と戦争の研究』二〇〇〇
- 4 在地勢力と言う概念からすると領主層も百姓（農民）も在地勢力である。新興勢力が成長していく過程と在地領主層が常備軍化する課程さらに家臣団化する段階は期を一にしている。このことは城郭研究において在地領主と百姓とは区別してみても置く必要性を暗示している。
- 5 城郭の紹介にあたっては現地調査の成果を中心に記載したが、各所で大分県教育委員会が行った城郭調査の調査成果（『大分県の中世城館第四集』二〇〇四年）も参考にさせていただいた。
- 6 水田の横に河川があるからと言って河川の深さと水田面の高さの関係から用水に使える地域が限定される。その点は遺跡から検証できる。例えば、河川からの取水口として用水路（堀）、田越しの水口などが残っている。河川からの取水口には水神さまが祭られている。このような用水管理と城郭（館も含む）が造られている位置かによって在地性を判断した。